

テクノスケープによる成熟都市のリデザイン*

—新しいコンバージョンの提案とその応用可能性—

山本 敏也

要約

高度経済成長期の「市街地拡張型」都市デザインは、都市のQOLの向上といった役割を果たしたが、都心部の空洞化など諸問題を抱える現代の成熟都市には、新たなリデザインが必要である。その手法には、土木建築物などのテクノスケープのコンバージョンが最適であるとともに、テクノスケープの「表層的評価」を、視点・評価軸を転換する新たなコンバージョンとして捉え直すことで、欧米の後塵を拝するわが国のコンバージョンの普及・発展と成熟都市の活性化に応用できると考えられる。

目次

1. はじめに
2. テクノスケープとコンバージョン
3. 「転換アプローチ」のコンバージョン
4. おわりに

1. はじめに

1.1 都市デザインと土木建築物

都市計画あるいは都市デザインにおいて、土木建築物はこれまで少なからぬ可能性を発揮し、重要な役割を果たしてきた。ハード面の整備が都市機能を向上・改善させるとともに、地域内外の人々に対して視覚的・精神的なアイデンティティを発信する有効な手段として機能したのである。身近な例でいえば、高度経済成長を起点に全国の郊外で開発された市街地や団地は、都市のQOL (Quality Of Life: 生活の質) の向上に加えて、「明るい未来都市像」「洋風な暮らしへの憧れ」といったイメージの表出による都市や地域ブランドの形成、さらに、新しい価値観の醸成にも大きく貢献した。

こうした、都市のQOLの向上、地域ブランドイメージの形成、新しい価値観の創造などの課題は、時代を問わず都市デザインが普遍的に直面するテーマであろう。しかし、都市や地域への関わり方は、取り巻く社会情勢や時代背景に即して変化せざるをえない。社会資本が不足していた高度経済成長期には、新たな市街地や団地の開発といった

「市街地拡張型」の手法が課題解決に適していたかもしれない。しかし、インフラが十分に満たされ、価値観の多様化など社会経済環境が急速に変化し、都市が成熟化する現代において(表1)、際限なく構造物を造成する従来型アプローチへの依存は、自然環境への配慮や都市空間の持続的発展という観点からすれば、もはや現実的ではない。

表1 社会経済環境の変化

- ・ 発展型成長から成熟型成長への転換
- ・ 企業・組織主体から個人主体への移行
- ・ 国際社会との整合性と競争
- ・ 需給関係の見直し (需要主導の時代の終焉)
- ・ 量から質の追求への転換

資料：明治大学都市政策市川ゼミナール・ホームページより作成。

1.2 成熟都市のリデザイン

第二次大戦後、先進国の都市では復興に際してエベネザー・ハワードの田園都市構想やル・コルビュジエに代表される近代都市論を実践したまちづくりが行われたが、その理論に基づく計画は(ア)都心の空洞化や賑わいの喪失、(イ)機能主義に基づく用途分離、(ウ)潜在的な田園志向に基づく空地の増大、(エ)歩車ゾーンの分離と道路の拡幅などの特徴を有したがために、都心部の空洞化や賑わいの喪失、地球温暖化の進行、犯罪の多発・治安の悪化といった様々な弊害をもたらし、各地で破綻をきたしている(図1)。

わが国における近代都市論に倣ったまちづくり

は、1.1 で述べたように一定の役割を果たした。だが現在では、図 1 と同様の問題をはじめ、ニュータウンにおける同世代の一斉入居に起因する居住者の高齢化と人口減少、さらに住宅や関連施設の老朽化といった「オールドタウン化」の問題が顕在化している。他方、民間レベルの開発をみても、経済性や効率性を最優先するあまり、張り巡らされた電線、高さの不均一なオフィスビル、雑然とした看板や標識など、無秩序で過剰ともいえる構造物が街じゅうに溢れ、都市景観を著しく損ねている。

このように、周辺地域特性、自然環境、住みやすさ・快適性、安心・安全、景観を無視した都市デザインが、都市の活力減退を招いている事実¹⁾は看過できない。したがって、上述の諸課題を抱えるわが国の成熟都市には、様々な環境変化に的確に対応できる持続的都市としての再構築、言いかえれば、成熟都市の「リデザイン」が急務である。

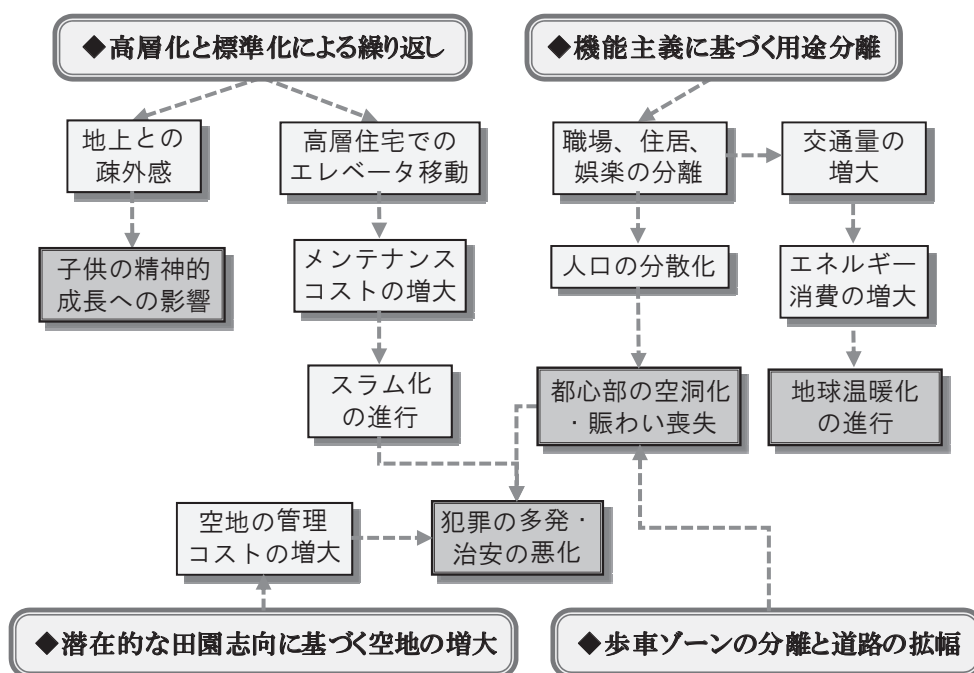
市川 (1998) は、「経済・社会における物質的生産と人びとの消費欲望水準が飽和に近づき、社会の活力や経済の成長が鈍化に至る状態」を成熟都

市とする一方で、「主体性をもった個人の知的水準の向上と集成によるパラダイムシフトにより、既存のストックを生かして高次の生活の質への希求をする都市」(下線は著者が付加)でもあり、ポジティブ及びネガティブ両方の側面を指摘している。

要するに、表 1 のような社会経済環境や価値観の変化を所与のものとしつつ、既存ストックを生かして都市の QOL をいかに高めていくかが、成熟都市の使命といえよう。では、目まぐるしく変化する諸環境に適応しながら、持続的な発展を可能にする成熟都市のリデザインとは、いったいどのようなものだろうか。

欧州では 1960 年代以降、地域の伝統や個性を無視した経済優先の開発から、都市環境を豊かにする方向へと徐々に切り替わっていった。住み暮らしてきた都市や地域——さらにはそのコンテクストにいたるまで——を壊してつくり変えるのではなく、少しずつ修復を繰り返しながらまちづくりを行う設計思想が、欧州では一般的となったようである²⁾。当然、そこには市民が住み暮らす、すなわち「人間らしく暮らし、生活できる空間」で

図 1 近代都市論による海外のまちづくりの特徴と問題点



資料：『まちづくりの新潮流』より作成。

あるという彼らの意思が明確に反映されていると同時に、リデザインされた場所には新たな意味と関係性が付与されている。こうした社会的なコンテキストに基づく市民・住民主体のデザイン技法が、成熟都市のリデザインの基本原則になるだろう。

都市デザインの分野で欧州の後塵を拝するわが国においても、都市空間設計の基幹となる技術が欧州と同様、時代とともに変化している事実を認識しなければならない。言い換えれば、ニュータウン開発のような今や旧世代の「新開発・団地型」、あるいは「スクラップ・アンド・ビルド型」から、保全・修復・改善・コンバージョン・インフィル³⁾型の開発や小規模再開発などが組み合わさって市街地がリニューアルされる「持続再生型」への転換である。新世代ともいべき持続再生型のアプローチとは、古くなった市街地や造成し損ねた市街地の再生を意味しており、欧州のまちづくりの変遷と轍を一にしている。

1.3 持続的発展とコンバージョン

持続再生型のリデザインを成功させるためには、次のようなシステムを構築することが望ましいと考えられる。まず1つには、「都市のアイデンティティの確立」とアイデンティティの「外部への発信」である。むろん、これらは旧世代の新開発・団地型技術でも実現できる。しかし、今日の時代背景からすれば、服部のいう「アイデンティティの発露には、必ずしも空間というハード面に手を加える必要はなく、空間の使い方や演出の仕方などのソフト面で都市魅力を高める」⁴⁾方法が妥当であろう。都市のポテンシャルや個性を表出したような空間とすることで、そこで生活する人々を豊かにすると同時に、その魅力によって多くの人々を引き寄せることになる、と服部は述べている。

2つには、様々な経済的・社会的活動を通じて、人、モノ、資金、情報を含む地域固有の資源が血液のように都市の内外を循環し、都市のQOLや創造性を高める仕組みである。これは、持続可能性(サステナビリティ)を有する自立循環型都市システムの構築と表現してもよいだろう。地域資

源を効果的に活用しながら、新たなビジネスモデルなどの経済システムや、市民としての意識(シチズンシップ)を醸成するような社会システム・教育システムを構築することが、持続再生型リデザインの成否を左右すると考えられる。

以上のような議論を基礎に、本稿ではいずれの都市・地域でもみられる既存の土木建築物による成熟都市のリデザイン手法として、コンバージョンの有効性を検証する。なお、対象とする土木建築物は、後で詳述する「テクノスケープ」(techno-scape)と呼称される工場、鉄塔、水門などの産業景観資源に限定する。なぜならば、(ア)欧米をはじめ世界各地にテクノスケープの活用事例が豊富にある、(イ)国内にもかつての基幹産業として発展した繊維・紡績、製鉄、鋳業などの構造物・施設が残存する、(ウ)「工場観賞」のように、現役で稼働するコンビナートや各種プラントなどに対する注目が近年高まっている、ことなどがその根拠である。

加えて、テクノスケープの評価体系を整理したのち、持続的な発展に不可欠な要素を有し、かつ短期的な視点から取り組むことのできる新しいコンバージョンの応用可能性についても検討を試みる。こうした一連のプロセスを通じて、成熟都市が次世代へ存続するためには、時代に即したリデザインが必要となることを示したい。

2. テクノスケープとコンバージョン

2.1 テクノスケープの登場

産業遺産としての活用が盛んな欧米はもとより、わが国でもようやくその機運が高まりつつあるいわゆる産業景観は、近年「テクノスケープ」と呼ばれるようになった。岡田(2003)によれば、テクノスケープとは、テクノロジーのシステムによって人間が構築した構造物が作り出す景観と定義されている。もう少し具体的に表現すると、工場・コンビナート等の建築物のほか、橋梁・ダム等の土木構造物、列車・航空機等の機械など、現役・退役を含めた様々な産業的な要素で構成される空間となるだろう(表2)。

テクノスケープは、人間の情緒的な思考という

表 2 テクノスケープの類型

①建築物	②土木構造物	③工作物	④機 械
住宅	空 港	高架水槽	機関車・列車 船 舶 航空機
寺 社	橋 梁	煙 突	
工 場	トンネル	広告塔	
倉 庫	水 門	鉄 柱	
学 校	堤 防		
病 院	ダ ム		
	港 湾		
	道 路		
	鉄 道		

資料：各種資料より著者作成。

よりも、機械的な計算によって形成されるために、無機質で冷たい印象を与え、嫌な景観としてネガティブに捉えられることが多い。事実、須山(2006)によると「近代化・工業化のなかで人為的に構築され、1960～70年代における反公害論によって排除されてきた景観」⁵⁾であった。近代化を象徴するこれらの景観は、「既存の環境（自然）を破壊

する元凶と見なされた」が、一方で工業化の過程では、住民らは大量の煤煙を出す煙突を「経済の繁栄」や「頼もしいもの」と評価していた⁶⁾。

このように、テクノスケープの評価は情緒的かつ流動的である。高度経済成長期を境にネガティブな評価が主流となっていたわが国のテクノスケープは、1980年代頃からプロの写真家、小説家、芸術家、夜景評論家など様々なジャンルの斬新な感性を持った人々の視点を通じて、その価値がポジティブなものに転換されていく(表3)。また、ほぼ時期を同じくして、産業遺産や近代化遺産の保存・活用の論調が盛り上がり、近年では地域振興のための資源に利用されることもしばしばである。さらに2000年代に入ると、ICT (Information Communication Technology) の進歩によって、テクノスケープの潜在的な愛好者のすそ野が一気に広がったとみることができよう。

表3 高度経済成長期以降のテクノスケープの価値転換の例

1980年代	(株)みなとみらい21	みなとみらい21事業 ('83年)	横浜都心部を一体化し、市内経済の活性化を目的とするウォーターフロント再開発事業。赤レンガ倉庫やドック等の歴史的建造物を再利用している。
	故・宮脇俊三 (作家)	『殺意の風景』 ('85年)	夜の工業地帯の宇宙基地的・幻想的な雰囲気を描写した小説。同作で泉鏡花文学賞と交通文化賞を受賞。
1990年代	小林のりお (写真家)	『ファースト・ライト』 ('92年)	夜の工業地帯や失われゆく情景を、乾いた目線で捉えた写真集。同作で第18回木村伊兵衛賞を受賞。
	丸々もとお (夜景評論家)	『東京夜景』 ('92年)	工場夜景の美しさをガイド本として発行。2000年代以降は体験型の工場夜景の仕掛け人として、各地の工場夜景ツアーのプロデュースも手掛ける。
	笠野頼子 (作家)	『タイムスリップ・コンビナート』 ('94年)	鋭い観察力で、京浜工業地帯の風景を奇妙で夢のような空間として描いた小説。同作で芥川賞を受賞。
	島山直哉 (写真家)	『ライム・ワークス』 ('96年)	日本各地に点在する石灰石鉱山とセメント工場を、精緻な構図と色彩で捉えた写真集。同作で第22回木村伊兵衛賞を受賞。

資料：岡田昌彰『テクノスケープ』及び各種資料を参考に著者作成。

ところで、海外におけるテクノスケープの価値の発見は、驚くことに1920～30年代から芸術家や建築家などによってすでに始まっていたようである。工業風景を撮影したドイツの写真家、アルベルト・レンガー・パッチュや、ドイツ・エッセンの「関税同盟ツォルフライン第12炭坑」⁷⁾(1932年)を設計した建築家フリッツ・シュップとマルティン・クレマーをはじめ、枚挙にいとまがない。

なお、テクノスケープをコンバージョンによっ

て積極的に活用した例は、ワシントン大学のリチャード・ハーグ教授が計画・設計した米国シアトル市の「ガスワークス・パーク」である(図2)。

当サイトは、1906年建設の石炭からガスを作る精製工場であったが、1956年に閉鎖される。その後、近隣企業の駐車場となっていたのを1962年にシアトル市が買い上げ、ハーグ氏にその活用について相談したところ、同氏は残存するプラント群を彫刻として保存活用することを提案した⁸⁾。紆

図2 ガスワークス・パーク
(上：1966年，下：2011年)



資料：Wikipediaより作成。

図3 エコミュゼ・ダルザス（野外博物館）



資料：著者撮影。

余曲折はあったが、1975年にはピクニックや日光浴、凧揚げなどが楽しめる公園として市民に公開され、国際的な賞も受賞している。

ほかにも、ドイツの「IBA エムシャーパーク」⁹⁾やフランスのエコミュゼ（エコミュージアム）¹⁰⁾

の1つ「エコミュゼ・ダルザス」（図3）など、コンバージョンによるテクノスケープの活用は今も増え続けている。

2.2 テクノスケープのコンバージョンへの応用

岡田は、テクノスケープの評価体系として、2つの視点を挙げている。1つは、近代化遺産や産業遺産のような、文化的・歴史的・社会的な意味づけによって景観の背後に見出された「意味の評価」である。もう1つは、背後に具体的な意味を必ずしも伴わない「表層的评价」である。

「意味の評価」は、テクノスケープが都市の原風景の一部を形成したり、テクノスケープの背後にある文明や生活そのものが間接的に評価される例である。近代化遺産を評価する際の、「技術の歴史」「文明の象徴」「公害の象徴」といった評価視点がこれに該当する。

一方、「表層的评价」は、テクノスケープの意味よりも「円柱のガスタンク」「等間隔の煙突」といった外観や形態、特異な雰囲気などを評価する価値観である。岡田によれば、こうした価値の発見は随筆家や写真家などの芸術家によって先導されてきたようであるが、ブログやSNS（Social Networking Service）などICTの進展による景観価値の伝播媒体の多様化も、表層的评价を支える重要な要素となっている。

さて、1.2でも言及した持続再生型の都市のリデザイン技術について、本稿では特にコンバージョンに注目して論じる。その理由は、世界各国でコンバージョンの取り組み事例が多いという情勢に対して、わが国では建築家や都市計画家が想定したほどにコンバージョンが普及していないためである。

一般に、コンバージョンとは「用途や機能の変更を伴う転換」を意味するが、建築デザインの視点から表現すると、既存の建築物（テクノスケープ）が持つ特性を生かしながら、新たなデザインを重ねることで、新築の建築物では生み出すことのできない独自の価値を創造することである。これは、既存ストックを活用して高次の生活の質を追求するという、市川が示す成熟都市の特徴と類似する。そればかりでなく、本稿が対象とするテ

クノスケープの活用や、それらが所在する都市・地域のリデザインの方向性とも合致する。

これらを踏まえると、評価のアプローチはともあれ、既存のテクノスケープをコンバージョンによって有効利用することは、持続的な発展をめざす成熟都市にとって最適な手法であり、そのプロセスは都市のリデザインそのものであるといえよう。なお、こうした手段を通じて、アイデンティティの確立・発信はもとより、地域資源の循環による都市のQOLや創造性の向上が実現できることは、海外の多くの事例が物語っている。

3. 「転換アプローチ」のコンバージョン

3.1 視点・評価軸の転換

欧州では、古代ローマ時代の遺産を中世頃から教会などに転用した例もあるほど、用途や機能の変更を伴うコンバージョンは伝統的なスタイルとして知られている(表4)。しかしながら、わが国では先に指摘したとおり、コンバージョンの普及が海外に比べて遅れているといわざるをえない。

その要因には、(ア)都心部又は地方都市の中心市街地でも、コンバージョンの優先順位が低い、

表4 海外の代表的なコンバージョンの一例

	名 称	所 在 地	転 用 前	転 用 後
イギリス	テート・モダン	ロンドン	発電所	美術館
	ヘイズ・ガレリア	ロンドン	波止場・倉庫	複合商業施設(店舗・事務所・集合住宅)
	ホートン・ミル	ホートン	水車小屋	ユースホステル ⇒ 博物館
	スピットバンク海堡	ポーツマス	海堡	歴史資料館・レストラン
イタリア	サンタ・マリア・デリ・アンジュリ教会	ローマ	古代ローマ時代の浴場	教会 ⇒ 修道院 ⇒ 博物館・教会
	ローマ国立博物館			
	カピトリニ博物館 モンテマルティーニ・センター	ローマ	発電所	メディアセンター ⇒ 彫刻博物館
	アンフィテアトロ広場	ルッカ	闘技場	要塞 ⇒ 住居 ⇒ (一部) 監獄・倉庫 ⇒ 広場
	リンゴット	トリノ	自動車工場	国際見本市市場・ショッピングセンター・ホテル・劇場・美術館
フランス	円形闘技場	ニーム	闘技場	城砦と住宅 ⇒ コンサート会場
	オルセー美術館	パリ	駅舎	美術館
	フランス文化省	パリ	百貨店倉庫	庁舎 ⇒ 文化省庁舎
	ヴィアデュク・デ・ザール	パリ	鉄道高架橋	店舗
ドイツ	イーヴェルク	ベルリン	変電所	レンタルオフィス・住宅・イベントスペース
	ヴィッテン文化センター	ヴィッテン	邸館	カルチャーセンター
	ハンブルク芸術協会	ハンブルク	市場	美術館・アカデミー
	デュイスブルク近代美術館	デュイスブルク	製粉工場	美術館

資料：各種資料より著者作成。

(イ)程度にもよるが、コンバージョンは技術や法規制などの面でスクラップ・アンド・ビルドよりもコストが高い、(ウ)コンバージョンで生み出された空間が個性的なために転売が困難である、といった問題があるといわれる¹¹⁾。

これらの事情を勘案すると、伝統的なアプローチとは異なるコンバージョンを模索する必要がある。そこで、工場夜景の鑑賞に象徴されるテクノスケープの表層的評価を、視点や評価軸を新た

に置き換えるという意味において、「新たな」コンバージョンに含めてはどうだろうか。もし、これを新しいタイプのコンバージョンと表せるならば、視点・評価軸の転換によって都市をリデザインすることができるようになる。

本稿では、この考え方を基礎にしたコンバージョンの再構築を提案する。すなわち、テクノスケープを活用した成熟都市のリデザインには、修復や改善など物理的に手を加える「伝統的なアプロ

ーチ」と、表層的評価のような視点・解釈の「転換アプローチ」の二つが存在するという概念である。

ただし、わが国の現状に即してみると、前者のアプローチは早期解決が難しい経済的・技術的・法的な諸課題を抱えていること、また、横浜レング倉庫のようにエリア全体の修復・再生が伴う場合、長期的視点によって進める必要があることから、海外並みのコンバージョンの普及にはかなりの時間を要すると想定される。

他方、後者の転換アプローチは、必ずしも物理的な加工による保全・修復・改修を伴わず、経済的な負担も少ないことから、即時的に取り組むことができる有効な手段となりうる。以下では、視点・解釈の転換アプローチに基づく都市デザイン

ンのポテンシャルについて、もう少し言及することにして。

3.2 新しいコンバージョンの応用可能性

前節で提案した、テクノスケープの表層的な価値を評価する「転換アプローチ」によるコンバージョンが、実はもう各地で始まっている。ここではその斬新なコンバージョンの事例をいくつか紹介する。

3.2.1 工場夜景観光

身近な例でいうと、近年、一般市民にも愛好者が広がりつつある工場夜景を観光するツアー商品の開発が、その急先鋒であろう(表5)。工場夜景ツアーはメディアでもしばしば紹介され、観光者

表5 転換アプローチによる工場夜景の活用例

地域	商品名	実施主体	企画協力・後援等	料金(税込)	サービス内容・特徴
北海道	室蘭夜景ナイトクルージング	スターマリンKK		●電話での事前予約 大人：3,000円(中学生以上) 小学生：1,000円(小学生以下)	・2010年5月から毎日実施(約50分、11~3月は木・金・土のみ) ・定員：12名(最少催行人員：不明) ・船内にはビールサーバーを導入
	交通船で行く工場夜景探検ツアー	京浜フェリーポート		●ホームページでの事前予約 大人：3,500円 子供：2,000円(小学生)	・毎週金・土・日曜日に実施(約90分)※残席があれば、18時から当日券を発売 ・交通船(人員輸送船)でスピード感のあるクルーズを体験できる ・定員：25名(最少催行人員：15名)
京浜工業地帯	工場夜景とみなとみらいクルーズ	ポートサービス		●電話・ホームページでの事前予約 大人：3,000円(中学生以上) 子供：2,000円(6歳以上)	・毎週金・土曜日及び特定期日に実施(約80分) ・横浜ベイブリッジなど定番の夜景とともに工場夜景を観光 ・定員：50名(最少催行人員：1名)
	川崎工場夜景屋形船クルーズ	長八海運株		●事前予約 大人：4,000円(中学生以上) 小学生：3,000円	・毎月第2・4土曜日に実施(約120分) ・川崎の7運河を巡り、京浜工業地帯の夜景を海から観光 ・定員：45名(最少催行人員：20名)
	工場夜景ジャングルクルーズ	(株)エムコーポレーション	丸々もとお(夜景評論家) 神奈川県商工労働局 (※かながわ観光大賞)	●電話・ホームページでの事前予約 大人：4,500円(12歳以上) 子供：2,250円(3歳未満無料)	・毎週土曜日に実施(約90分) ・神奈川県京浜臨海部産業観光協議会助成認定事業 ・定員：30名(最少催行人員：1名)
	川崎工場夜景バスツアー	(株)JTB 法人東京	川崎市経済労働局 川崎市観光協会 丸々もとお	●電話による事前予約(先着順) 大人：3,200円(中学生以上) 小学生：2,500円	・2010年4月16日から毎月第1・3金曜日に実施(約180分) (東日本大震災後は一時中断、2011年5月から定期運行再開) ・定員：45名(最少催行人員：30名) ・多彩な観光資源の浸透・活用や集客の促進により、同市の産業や産業観光への理解を深め、地域経済の活性化を図ることが目的
	川崎工場夜景スポット	(株)はとバス	川崎市 川崎市観光協会連合会 丸々もとお	●電話・ホームページでの事前予約 大人：5,980円 子供：4,380円	・同ツアーが特別に展望できるスポットを用意 ・毎週土曜日、8/19・26 ・定員：不明(最少催行人員：20名)
	近畿	姫路市工場夜景ツアー	姫路市 神妙バス株	姫路市観光交流推進室 姫路商工会議所 小林哲朗(写真家)	●電話での事前予約 大人：4,500円 子供：3,500円
中国・九州	みつけて周南工場夜景クルーズ	(株)JB 中国四国	周南市観光政策課 周南市観光協会 丸々もとお	●電話での事前予約 大人：3,800円(中学生以上) 子供：2,500円(小学生未満無料)	・毎月運行(約120分) ・定員：45名(最少催行人員：25名) ・12月24日にはのクリスマスクルーズも催行
	工場夜景ハフティングクルーズ	シーホース	周南市観光政策課 周南市観光協会 丸々もとお	●電話での事前予約 大人：4,000円	・毎週土・日曜日の予約運行(不定期、約90分) ・定員：12名 ・工場プラントやクレーン群を夜に棲む動物のように見立てて観光する
	ドラマチック工場夜景バスツアー	防長交通株	周南市観光政策課 周南市観光協会 丸々もとお	●電話での事前予約 大人：3,800円(中学生以上) 子供：2,500円(小学生未満無料)	・隔週土曜日運行(約90分) ・定員：45名(最少催行人員：20名)
	工場夜景プレミアム宿泊プラン	ホテルサンルート徳山	周南市観光政策課 周南市観光協会 丸々もとお	・スイート(大人2名1室利用)：21,000円 ・ラジツイン(大人2名1室利用)：12,000円	・工場夜景をテーマにした全国初の宿泊プラン ・周南市臨海部の工場夜景が楽しめる客室を選び、工場夜景の楽しみ方の解説シートや丸々もとお氏オリジナルの夜景グッズ(フレグランス、入浴剤等)がもらえる
	北九州工場群夜景観賞ツアー(クルーズ&バス)	(株)JB九州	北九州市観光・コンベンション課 九州国際大学・市原猛志	大人：3,500円(中学生以上) 子供：2,800円(座席を使わない小学生未満は無料)	・2011年2月から期間限定でスタート。好評につき、10~12月は毎月2~3回のペースで催行 ・定員：45名(最少催行人員：25名)

資料：各社・自治体ホームページ等より著者作成。

のすそ野が工場景観マニア以外にも拡大しつつあり、ツアーの中にはクルージングなどの予約が取りにくくなるほどの盛況ぶりである。

さらに、工場夜景観光に積極的に取り組んでいる室蘭市（北海道）、川崎市（神奈川県）、四日市市（三重県）、北九州市（福岡県）の四地域が連携し、2011年2月23日に「全国工場夜景サミット」を開催するなど、全国に先駆けて工場夜景というテクノスケープの可能性を探り始めている¹²⁾。これらの都市では、かつて市民にとって「負」のイメージが強かった工場が、今や観光対象として注目されるばかりか、わが街の誇りに変貌しようとしている（図4）。

図 4 室蘭市の工場夜景



写真提供：室蘭観光推進連絡会議。

3.2.2 フォトモ鑑賞

工場夜景のほかにも、ユニークな発想で建築物をアートに転換する例がある。美術家・写真家の糸崎公朗が提唱する「非人称芸術」（Impersonal Art）のコンセプトは、転換アプローチ型のコンバージョンに近いと考えられる。

糸崎によれば、非人称芸術とは「超芸術トマソン」¹³⁾の概念を継承・発展させたものである。つまり、風雨にさらされたモルタル家屋の壁のシミ、増改築で奇異な形をした建物、複雑に伸びた配管などのような建築物を、美術館の作品のごとく芸術性を持ったオブジェとして鑑賞する方法である。少し違う表現をすると、商店街のパン屋や八百屋などの並びを「街並み」としてではなく、「自分の知らない、奇妙なアート作品」の連続として捉

える考え方が、非人称芸術である。

この概念の特徴は、まず、都市にある建築物という「芸術作品」に創作意図は存在せず、鑑賞する側によって芸術作品として見立てられているに過ぎないという点である。そして2つには、非人称芸術を一般の人々にも分かりやすくするために、フォトモ¹⁴⁾という手法でテクノスケープが表現される点である（図5）。特に後者の特徴に関して、実物の街並みがプラモデルのように縮小されることで、本来有していたテクノスケープの「機能」は失われ、「純粋な形」として変換される。この意味で、フォトモ鑑賞はテクノスケープの表層的評価ときわめて共通した視座を持つことが理解できよう。

このように、フォトモは名所旧跡、歴史的あるいは著名な建築物ではなく、商店街、町家、繁華街など、ごくありふれた街中のテクノスケープの外形を浮き立たせる有効なツールとして、大きな可能性を秘めている。

図 5 フォトモの一例



資料：オリンパスホームページからダウンロードした型紙より著者作成。

3.2.3 キョート*ダンメンロシュツ

京都でも年々町家を取り壊され、空き地が増えるにつれて伝統的な町並みが失われつつある。そこで、京町家の解体の際に出現する切断面を「ダンメンロシュツ」と名付け、ある一級建築士事務所が主宰となって「キョート*ダンメンロシュツ」という組織を結成し、ユニークな活動を展開して

いる。

歴史のある町家に残っているものの、表の町並みからは知ることができない増改築の状況、町家の元の形や位置関係、跡地の使われ方などを、切断面から丹念に調べる。ただし、歴史的な検証のみならず、キョート*ダンメンツアー（切断面の形状や質感、空き地スペースの面白さなどの観賞）の開催（図6）、ダンメンのベストセレクション¹⁵⁾の公表、キョート*ダンメンプロジェクト（切断面の有効活用の提案）といった、転換アプローチ的なコンバージョンも行われている。

これらの取り組みの視座が斬新なのは、町家の解体やそれとともに現れる切断面を「負」や「病魔」と捉えるのではなく、「新たなスペースの創造」というプラスの価値に転換させるところである。同ブログのトップページに書かれた「この世におもしろくないものなどない、おもしろくない見方があるだけだ」というフレーズは、転換アプローチによるコンバージョンを展開する上で、力強いエールのようにも聞こえる。

図6 キョート*ダンメンツアーの様子



写真提供：キョート*ダンメンロシュツ。

3つの事例をまとめると、それぞれが従来の既存概念に縛られない自由な発想によって生み出された都市や地域の眺め方であり、本稿で提案した新しいコンバージョンの応用例として、大きなインプリケーションを持っている。また、民間企業のみならず、行政や市民も協働して転換アプローチのコンバージョンにチャレンジする姿は、成熟

都市のリデザインの基本原則に掲げる、社会的なコンテキストに則った市民主体のデザイン技法に適用と考えられる。

4. おわりに

本稿では、成熟都市のリデザインに適したツールとしてコンバージョンに着目した。そして、伝統的なコンバージョンに代わって、視点や評価軸を新たに置き換える画期的なアプローチを提案し、直近の事例を踏まえながらその可能性について言及した。

なお、こうした新たなアプローチを設定することにより、次のような問題が発生するかもしれない。それは、テクノスケープの表層的な価値の探求が、背後にある意味への無関心を招く恐れである。炭鉱遺産や工場などで過去にあった、事故・閉山・強制労働・公害といった負の記憶を捨象し、表面的な景観の美しさだけを賞賛する向きに対して、地域住民からの反論が起こらないともいえない。

この点については、テクノスケープへの興味が当初は表層的な価値にあったとしても、何らかの体験をきっかけに、背後の意味の探求へ関心が移行することも考えられる¹⁶⁾。ただし、人々の関心を強制的に移行させるのはきわめて難しく、無理なく人々の興味を変化させるような、ソフトによる仕掛けの導入など、問題解決にはさらなる議論の余地があるため、次稿の課題としたい。

ともあれ、本稿ではコンバージョンにおける新たなアプローチを提起したことで、わが国の事情に即したコンバージョンの普及や、成熟都市のリデザインの可能性を見出すことができた。短期的には、この方向性に沿って、空間の使い方や演出の仕方といったソフトの部分を活用し、工場夜景ツアー、フォトモ、ダンメンロシュツのような都市の魅力を高める創造性豊かなチャレンジを重ねていくことが重要である。

ただ、注意しなければならないのは、転換アプローチによるコンバージョンは、必ずしもテクノスケープを観光資源化することを目的としていないことである。上で紹介した事例のような活動を契機に、地域の人々がまずわが街に関心を持ち、こ

れまで忘却、もしくは見捨てていたテクノスケープを見つめ直し、それが持つ新たな価値を再発見することで成熟都市を元気にすること、すなわち、リデザインの遂行に欠くことのできないアイデンティティの確立・発信、及び地域資源の循環による都市の QOL や創造性の向上が本来の目的である。

それゆえ、視点や評価軸を変える行為を「コンバージョン」とみなして、成熟都市の活性化の仕掛けとして活用できれば、従来のコンバージョンよりもコストや時間をかけることなく、目的を実現できるとするのが本稿の主張である。

上述した先駆的な取り組みは、おそらくほんの氷山の一角に過ぎないであろう。こうした創造的かつ斬新な仕組みをできる限り見つけ出し、その原理を発展・普及させることが次世代に向けた我々の使命ではなかろうか。

* 本稿作成にあたり、近畿大学理工学部社会環境工学科准教授岡田昌彰先生、吉永建築デザインスタジオの吉永健一氏から大変貴重なコメントや示唆を頂戴した。また、室蘭観光推進連絡会議から工場夜景の写真を提供して頂いた。ここに深謝の意を表す。ただし、本稿に含まれる誤りは全て著者の責に帰するものである。

〔注〕

1) 海外の具体的な失敗例としては、以下のよう
なものが挙げられる。

① ブルーイット・アイゴー団地 (米国・セントルイス, 1954~1972 年)

■人口減少が続くセントルイス市の目玉となる高層住宅団地プロジェクトであったが、建設予算縮小により、ローコストで画一的な計画に変更された。

⇒スキップ・ストップ (一部の階にしか停まらない) ・エレベータや死角の多い共用スペースなど、低所得層住民の住みやすさを考慮しなかったためにスラム化し、犯罪の温床となる。

⇒環境が著しく悪化して入居者が激減し、1972 年に爆破解体。

② ヒューム地区 (英国・マンチェスター, 1966~1971年)

■スラムクリアランス事業として、産業革命後の人口急増で過密化した労働者階級の居住地区をスーパーブロック (大規模な住宅団地や都市再開発などの際に、数街区を一つにまとめた大街区) 化し、高層とデッキアクセス住棟による英国最大規模の公営住宅団地を建設した。

⇒巨大ブロック計画の不人気、建物の質の悪さ、社会的孤立や鬱病の問題等により、住民の反対が起こる。

⇒団地での子供の転落死事故を契機に、議会が家族持ち世帯全ての転居を決議。同地区は加速度的に衰退し、貧困・犯罪・麻薬・失業・バンダリズムという負の連鎖により荒廃がさらに進んだ。

③ ベルマミーア団地 (オランダ・アムステルダム, 1968~)

■中産階級のオランダ人家族の入居を想定した同団地は、鉄道延伸の遅れ、不便な通勤や買い物、予算不足によるエレベータ数の不足などに不満を持つ住民が次々に流出した。

⇒低所得者層や旧植民地からの移民が入居したが、廊下の長い高層住棟や広い駐車場、車道と分かれた歩道など、犯罪の温床となる「死角」が多く、街路や緑地の管理・警備など巨大なコミュニティの運営管理システムも未整備であった。

⇒住民は恐ろしい環境として拒絶反応を示し、同団地はいずれの住民のニーズにも適合しなくなった。

2) 例えば英国の住宅政策では、1970年代頃から、地域の伝統や個性を無視した全面的なクリアランス手法による再開発がコミュニティの連帯を破壊するものとして否定され、修復・改善的手法に切り替えられた。

3) 地域開発の一部として既存の土地を使用して建築や開発を行うこと。

4) 服部圭郎、「ヨーロッパから学ぶ『豊かな都市』のつくり方—連載にあたって—」 p.3.

5) 当時のわが国には、テクノスケープの概念は

まだ存在していない。

- 6) 例えば、大阪市立鷺洲小学校校歌「煙は高く空をおおいて 鷺洲の里は にぎわえり」のように、上空を覆う工場の煙を都市の繁栄に見立てて称えるケースは、校歌や戦前の小学校の教科書などで散見する。
- 7) 新即物主義の様式で二つの軸を配置した中央立坑設備を左右対称と幾何学の原理に基づくデザインで、コークス製造工場を含む複合施設は世界的にも独特の産業景観である。建築面・技術面で同業施設の傑作と評され「世界で最も美しい炭鉱」と呼ばれている（ドイツ観光局、ドイツニュースダイジェスト ホームページより）。
- 8) 岡田昌彰（2009）「シアトルのガスワークスパーカービルトイン・アメニティを醸成した30年」『土木学会誌』Vol.94, Jan, 2009, p.10.
- 9) Internationale Bauausstellungの略で、国際建設展覧会のこと。
- 10) フランスの博物館学者アンリ・リビエールが提唱した、新しい博物館のスタイル。地域をまるごと「生きた博物館」として、地域の様々な有形・無形の資源を地域の人々が中心となって活かしつつ、保全する取り組みをいう。
- 11) 鳥海基樹（2008）、「マクロなコスト・ダウンによる建築コンバージョンの推進序説」『世界のコンバージョン建築』鹿島出版会，pp.18.
- 12) 第2回のサミットでは姫路市も参画した。
- 13) 前衛美術家の赤瀬川原平が発見した芸術上の概念で、不動産に付属、もしくは保存されている無用の長物のこと。
- 14) フォトグラフ（写真）とモデル（模型）の造語で、写真に写った建築物等を切り抜き、プラモデルのように立体的に組み立てて3次元化する手法。
- 15) 約2,700件に及ぶ切断面のうち、1,000件超について、その特徴により以下の6つに類型し、ジャンルごとに5段階評価によるダンメン度ランキングをつけている。

キリクチ	隣家が壊されたことによって現れる町家の切断面
テンシヤ	壊された隣家の形が写されたダンメン

ウラマチナミ	キリクチ、テンシヤが町並みのように並んだダンメン
チソウ	町家の履歴が地層のように現れたダンメン
ニッチ	町家が壊されてできた町並みの中のニッチスペース
ポツン	周りが壊されてポツンと残された例

- 16) 岡田昌彰（2009）、「テクノスケープ発見の契機－発見と効果の醸成術」『建築雑誌』2009年1月号，pp.12.

〈参考文献〉

糸崎公朗（2004）、「建築をオブジェに変換する視点」『建築のフィギュア』INAX出版，pp.29.

市川宏雄（1998）、『成熟都市東京のゆくえ』ぎょうせい。

太田浩史（2007）、『世界のSSD100－都市持続再生のツボ』彰国社。

岡田昌彰（2003）、『テクノスケープ－同化と異化の景観論』鹿島出版会。

岡田昌彰（2009）、「テクノスケープ発見の契機－発見と効果の醸成術」『建築雑誌』2009年1月号，pp.12-13.

岡田昌彰（2009）「シアトルのガスワークスパーカービルトイン・アメニティを醸成した30年」『土木学会誌』Vol.94, Jan, 2009, p.10.

建設政策研究所編（2004）、『「都市再生」がまちをこわす－現場からの検証』自治体研究社。

建築・都市ワークショップ＋石黒知子編（2004）、『建築のフィギュア』INAX出版。

小林克弘ほか（2008）、『世界のコンバージョン建築』鹿島出版会。

ジャイム・レルネル（2005）、『都市の鍼治療－元クリチバ市長の都市再生術』丸善。

須山 聡（2006）、「韓国におけるコロニアルタウンの景観－同化と異化、保存・利用・破壊－」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議。

松永安光（2005）、『まちづくりの新潮流』彰国社。

吉岡宏高『炭鉱遺産を主題にした「場」のマネジメント－三笠市幌内地区の市民活動における実践的研究－』

〈参考資料〉

川崎市経済労働局ホームページ (http://www.city.kawasaki.jp/org_5.html), 2012年2月21日閲覧.

社団法人北九州市観光協会ホームページ (<http://www.kcta.or.jp/>), 2012年2月21日閲覧.

キョート*ダンメンロシュツホームページ (<http://www.ne.jp/asahi/yos/studio/danmen/>), 2012年2月21日閲覧.

小林のりおホームページ (<http://artbow.com/index.html>), 2012年2月21日閲覧.

佐藤健正, 『イギリス社会住宅の団地再生』, 市浦ハウジング&プランニングホームページ (http://www.ichiura.co.jp/e_saisei/top01.htm), 2012年2月21日閲覧.

佐藤健正, 『イギリスのハウジングを巡る旅ー近代のハウジングはどのようにつくられてきたかー』, 市浦ハウジング&プランニングホームページ (http://www.ichiura.co.jp/e_housing/top01.htm#), 2012年2月21日閲覧.

シアトル市ホームページ (http://www.seattle.gov/parks/park_detail.asp?ID=293), 2012年2月21日閲覧.

周南市・みつけて周南『ゆる旅』キャンペーンホームページ (<http://mitsukete-shunan.com/top.html>), 2012年2月21日閲覧.

ドイツ観光局ホームページ (<http://www.germany.travel/jp/towns-cities-culture/unesco-world-heritage/essen-zollverein-coal-mine-industrial-complex.html>), 2012年2月21日閲覧.

ドイツニュースダイジェストホームページ (<http://www.newsdigest.de/newsde/features/2048-unesco-world-heritage-in-germany.html>), 2012年2月21日閲覧.

日本四大工場夜景エリアホームページ (<http://www.kcta.or.jp/yakei/index.html>), 2012年2月21日閲覧.

服部圭郎, 「ヨーロッパから学ぶ『豊かな都市』のつくり方」, 公益財団法人ハイライフ研究所ホームページ (<http://www.hilife.or.jp/wordpress/?p=3992>), 2012年2月21日閲覧.

林 直人 (2010), 「少子高齢化及び人口減少時代に対応した大規模住宅団地の再生」第21回日・韓建設技術セミナー共通課題発表 (都市住宅セ

ッション), 財団法人国土技術研究センターホームページ (http://www.jice.or.jp/international/nikkan/pdf/nikkan2010_06.pdf), 2012年2月21日閲覧.

反省芸術blog3のホームページ (http://itozaki.cocolog-nifty.com/blog/2007/09/post_bad7.html), 2012年2月21日閲覧.

姫路市ホームページ (http://www.city.himeji.lg.jp/koho/press/_23638/_25474/_25556.html), 2012年2月21日閲覧.

室蘭市ホームページ (<http://www.city.muroran.lg.jp/main/org6400/yakei.html>), 2012年2月21日閲覧.

むろらん夜景ホームページ (<http://www.muro-kanko.com/yakei/index.html>), 2012年2月21日閲覧.

ヨコハマクルーズホームページ (<http://www.yokohama-cruise.com/>), 2012年2月21日閲覧.